

I. 総説

1. 本県管轄の沿革

古 代

わが国土には洪積紀から原日本人ともいべき人種が住んでいて、新石器時代の文化を開いた。

千葉県には新石器時代の遺跡が、東京湾斜面の西部地方、利根川流域ことに手賀、印旛の二沼をめぐる北部地域、館山湾から鴨川に至る低地を中心として約740か所あり、そのうち570近くの貝塚があって、石鏃等の石器類や、縄文式土器、或は骨角製の釣針等が出土し、又堅穴住居も発掘されて、太古から多くの住民が狩猟、漁撈の生活を営んでいたことを物語っている。

前1世紀頃から、弥生式土器の文化が西日本から東日本に波及し、次第に農耕生活に進んだのであるが、その弥生式土器もまた県内各地から発見される。

3,4世紀の頃、大和朝廷の国家統一が成り、東方蝦夷鎮定のためと思われる経津主命の香取鎮座があって、この方面が次第に開発され、また忌部氏は四国の阿波から黒潮に乗って安房に移住し、祖神太玉命を祀って安房神社を建て、麻と穀物を栽培し、麻がとくによく生育したので、総(ふさ)の名がおこったといわれている。国造は阿波、長狭、伊瀨、武社、菊間、須恵、馬来田、上海上、千葉、印旛、下海上に置かれて中央との連けいは密であった。こうした古代房総の開発は5世紀を最盛期とする高塚式古墳が約10,000か所もあり、東葛、千葉、市原、君津の4郡と香取、印旛の2郡を中心に分布して、金属の遺物を出すことから理解される。

上 代

大化改新により、安房、上総、下総に国司が任命され、蝦夷経営の要地として軍団が設けられ、駅の制度もかなり整っていた。奈良時代、安房、上総、下総の三国にそれぞれ国分寺が建立されて、地方文化の中心となった。現在国分寺跡から発見される瓦は芸術的にも技術的にも優秀さを示している。又穀物や麻の栽培がさかんとなり、特に良質の麻布を調布、庸布として貢献した。

平安時代、地方政治がびん乱して、天慶年間平将門の乱が起り、房総の地は疲弊した。次いで平忠常、土気大椎城に拠って叛したが、源頼信に降り、のち許されて上総介に任ぜられ、子孫は前九年、後三年の両役に軍功があって両総の権臣となり、千葉氏、上総氏として権威を両総に振った。

中 世

源頼朝が鎌倉に幕府を開くに際しては、千葉常胤、上総広常の功が大きく、安房の安西、丸、神余、東条の諸氏も頼朝に協力し、安堵の状を得てそれぞれ房総の所領を治めた。室町戦国時代には、安房の里見をはじめ、千葉、土岐、武田等の諸氏および、相模の北条氏が中央政権の争奪戦や、関東管領の対立抗争の渦中に巻きこまれて戦乱を専としたので、房総の地は四分五裂して、人民は大いに苦しんだ。この間郷土の傑僧日蓮の唱えた法華宗が広く信仰された。

近 世

秀吉が北条氏を征して関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くや、房総の地は膝下として重要であるため、幕府は、天領、旗本領や佐倉藩をはじめ譜代の小藩を配置した。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には23藩であった。この間房総の開墾事業は進み、十六島の開拓、榛海干拓約2,800町歩、手賀沼疎水の開通、印旛沼の干拓計画などあって耕地が大いに拡張され、享保年間には青木昆陽によって甘藷が栽培され、生産は次第に増加した。又行徳を主として各地に塩田が開発された。一方では、野田、銚子の醤油醸造業も次第に発達し、江戸はもとより全国に名声をうたわれるに至った。

現 代

明治元年、大政奉還が行なわれ、大名領以外の地に、安房上総監察知県事と下総知県事がおかれ、2年には葛飾県と宮谷県となり、同年6月藩籍奉還によって旧藩主は藩知事となり、4年7月、廃藩置県によって県となった。安房では館山県ほか3県、上総は大多喜県ほか10県、下総は佐倉県のほか6県、更に同年11月改めて上総、安房両国を合して木更津県を、下総国に印旛県をおき、6年6月木更津、印旛の両県を廃して千葉県となし、県庁を千葉町においた。8年5月、新治県所管の香取、匝瑳、海上の3郡が千葉県の管地となり、猿島、結城、岡田、豊田の4郡と、葛飾郡および相馬郡の一部を茨城県に割いて、江戸川、利根川を境界とする現在の境域が決定した。その後、本県は首都の隣県として、明治、大正、昭和と県勢を振り現在に至った。